

世紀のドラマといわれた米中首脳会談がおわり、共同コミュニケも、ほぼ予想された内容をもって発表された。「イメージの政治」とも思われる米中首脳の華麗なテレビ・ショーのあとには、今度はそうしたドラマからはみだした現実が待ち受けている。周恩来総理はさっそく、北ベトナム首脳との会談を行わなければならなかったという情報も伝わっているし、北朝鮮首脳との意見調整もやがて必要になってくるかもしれない。

●外交時評

米中コミュニケ以後のアジア

中嶋嶺雄(東京外語大学助教授)



一方、アメリカ側は、コミュニケの文面では「古い友人たち」を棄てないという公約を果たしたものの、従来の同盟諸国に与えた反響は無視できず、グリーン国務次官補を各国につかさざるを得なかった。

それほどこまで、米中会談がアジア諸国に与えた動揺と懐疑は大きく、情勢は決して単純なものではない。ここに米中双方のジレンマもあるわけだが、とくに中国にとって最大の懸念は米中接近にたいする北ベトナム・解放戦線の冷たいまなざしであろう。そして、中国の首脳が

華麗な宴のあとの現実に気づいたとき、すでに北ベトナムは、共同コミュニケのなかの米中双方の合意部分を引用して、これに激しい非難を加えているのである。

しかもその背後には、昨夏のソ印条約締結以来、印パ戦争、バングラデシュ独立、それに今日の米中の「醜い結合」を経て、アメリカのアジアからの撤退のあとに、着々と「新しい中国封じ込め政策」の成果をあげつつあるソ連の、しのびよる脅威がある。そのソ連の脅威こそ、

米中会談へと中国側を導いていった最大の原因だが、対ソ問題は中国にとって、今回の林彪以下一連の軍首脳の失脚にみられるような中国自身身の「路線の問題」に結びつくだけに、それは二重の脅威となって中国の指導者を脅かさずにはおかない。米中首脳が、あれほどの長時間に

わたり、世界のあらゆる問題を話し合った形跡にありながら、ソ連にかなする字句がコミュニケにまったくあらわれていなかったことこそ、米中会談の隠された最大の問題点なのである。今回のコミュニケを注意深く読めば、その最

大限の合意点は、米中双方が世界情勢、とくにアジアの情勢について、これ以上、ドラスチックな現状変更を避けようとしたことであり、アメリカはアジアからの撤退という「グアム・ドクトリン」以来の既定方針をできるだけスムーズに遂行しようとし、中国は、かつてのように世界の反体制陣営のチャンピオンとして、現状打破勢力を結集するのではなく、国連参加以後の中国の国家外交をより積極的に進めようとしていることが明らかになった。台湾問題も、このような大前提があったからこそ、コミュニケに見られるように、早急な解決を双方とも避けようとしたのである。

ここに米中会談の大きなカギが宿されていたのだが、一方、今日のアジアを見てみると、そこに従来とちがって、最大の現状打破勢力として存在しているのは、その海軍力をも背景とするソ連であり、第二の現状打破勢力は、アジア社会の内部に、経済的・社会的に深くくいこんでいる日本の存在であろう。従って、米中接近は、ソ連および日本との米中両国のあつれきを増大させる客観的背景をもっている。とくに、ソ連のアジア政策の将来を考えると、アジアには、中ソ対立にからむ多角的な緊張が、今後はたんなる社会主義圏内部の問題としての意味を越えて出てくる可能性もあろう。

われわれは、米中接近を手ばなしで喜んでばかりはいられないのである。